

泣くも笑うも、  
生きる喜びあればこそ

講談師  
神田香織  
さん



広島の被爆を描いたロングセラーマンガ  
『はだしのゲン』を講談にして20年。  
講談師の神田香織さんは  
「今、自分がとても幸せな時代にいることがわかった」  
という感想を聞いた時に、子どもたち一人ひとりの心の中に  
平和の灯がともっていることを確信している。

フロントランナー

第35回

取材・文/関原美和子  
写真/八木美枝子

強きをくじき、弱きを助ける

「……家族からたった一人離れた九歳の少年の胸には、やりきれない孤独感がこみ上げてまいります。「お母ちゃん、お父ちゃん、今行くでー、待っていてくれー」。流れる涙をけなげにこらえて、わが家を目指して走るゲン。愛する家族の安否はいかに!? 父は母はきょうだいたちは。無事でいてくれ。生きてておくれ。そして笑って迎えておくれ」――

リズム感ある語り。場の空気を引き締める張り扇せんの音。神田香織さんの十八番、「講談はだしのゲン」の一コマ。照明や音

響効果も取り入れた「立体講談」だ。

「学校に呼ばれて『はだしのゲン』を語りますと、子どもたちも先生もみんな涙、涙です。この物語は戦争の悲惨さだけでなく、苦しい状況の中でも生きていこうとするたくましさも描かれています。希望につながるラストシーンに救われるんですね」香織さんが「講談はだしのゲン」を創作し、語り始めてから二〇年。

「始めた頃は、『戦争を知らない私などがおこがましいのでは?』と思ったこともありました。でも公演後に被爆者の方々から『ずっと続けてほしい』と励まされて……終戦から六〇年以上経ち、多くの被爆者の方々が亡くなりました。最近、特に原爆を語り継ぐ必要性を感じています。私自身も講談をとおして、生きる強さをもらっているのです」

義理人情や忠孝信義を描くことが多い講談。

「そのアナクロさが受け入れられず、昭和には一時衰退したのですが、最近はまだお客さまが増えてきたんです。強きをくじき、弱きを助ける講談の内容が、バブル崩壊後の現代に合うのかもしれないね」

講談でなまりがなくなった!

香織さんが講談の道に入ったのは、おく



に言葉のなまりを直そうと思ったことからだった。

「俳優を目指して高校卒業と同時にいわき市（福島県）から上京し、劇団養成所に入りました。ところがせっかくだが、役がついても、平板なアクセントのため、何度も矯正させられるんですね。昨年以上映された映画『フラガール』の舞台がいわきなんです。登場した人たちがしゃべっていた、あのイントネーションです（笑）。これじゃ俳優はやっていけないかなと思うと同時に、人前で話すのがイヤになってしまっ

て」

そんなとき、知人に誘われて講談をのぞく。「俳優を続けながら、講談の稽古をつけてもらっていたのですが、迫力にもうびつくり。そして何より驚いたのは、広い音域やおなかの底から出す発声の仕方などを学ぶうちに、なまりがとれたことでした」



気づいたら、講談師の道一本に絞っていた。「言葉って、言霊とも言うでしょう。講談は、まさに人の魂を動かす力を持っている。しかも五〇〇年も前からずっと。当時は講談が危機的状况にあったので、何とかしたいという気持ちも強かったのかもしれない」

神田山陽師匠に弟子入りし、三年間の行儀見習いと下働きの前座修行を経て、一九八四年、二つ目に昇進した香織さんは噺家

としてスタートを切った。

### 「はだしのゲン」との出会い

昇進祝いのサイパン旅行が、香織さんの講談師人生を大きく変えることになる。

「遊びに行ったサイパンで、多くの戦跡を見ました。サイパン島陥落の際、多くの民間日本人が飛び込み自殺をしたパンサイ岬を回ったとき、胸がいっぱいになって……。」

“頭の中で描いたシーンは、いつまでも心の中に残っていくのです。”

ソノシテ

二つ目になると、古典も新作も自由に演目を決めることができます。ぜひ戦争を講談にしよう、と、帰国してから戦争について学び直しました。広島や長崎の原爆、東京大空襲、沖縄戦……知れば知るほどあまりに重いテーマで、無理かもしれないとあきらめかけたとき、「はだしのゲン」(汐文社)と出会いました。「はだしのゲン」は、広島を舞台に原爆を落とされた人々の様子を描いたマンガです。悲惨な内容の中にも生

## PROFILE

### かんだ・かおり

福島県出身。県立磐城女子高等学校卒業後、東京演劇アンサンブル、渡辺プロダクションドラマ部を経て、1980年神山陽門下生に。二つ目以降、独自の講談を次々と発表し、新境地を切り開いている。86年講談「はだしのゲン」公演で日本雑学大賞受賞。95年いわきサンシャイン大使に任命。98年いわき商工会議所婦人会名誉会員となる。オリジナル作品に「新版はだしのゲン」「いわき発安寿と厨子王物語 平成版」「漢方復興物語 和田啓十郎伝」「チェルノブイリの祈り」など多数。



きる勇気をもたらえるパワーに満ちた作品に感動し、すぐに原作者の中沢啓治さんに連絡を取り、講談にしたいとお願いしたのです」

「若い人たちにも伝えてください！」

「講談はだしのゲン」を発表した一九八六年、チェルノブイリ原発事故がソ連（現ウクライナ共和国）で発生した。

「原爆は戦争のため、原発は平和利用のため、と目的は違いますが、放射能汚染という被害は同じ。私の故郷の福島にも原子力発電所がありますから、他人事ではありません」

平和への思いが膨らむ中、二〇〇一年に、被災者や関係者の声を集めたルポ「チェルノブイリの祈り」（岩波書店）に出会う。

「普通の人々の声に衝撃を受けました」  
香織さんは原作者のスベトラナ・アレクシエービッチさんの承諾を得て、二〇〇二年講談を創作した。

「事故処理にあたり被曝した消防士の妻の独白をもとに創り上げました。新婚まもない夫が病院のベッドの上で一日一日悪化していく——水ぶくれができ、皮膚がずりりとむけ、内臓が口から出てきて、どんどん別の人になっていく。それでも妻は愛している夫を看病し続けるのです。」

講談を聞いた女子高校生たちが感想を寄せてくれました。「今までテレビ番組などでチェルノブイリのことは知っているつもりだったけど、こんなにひどかったなんて……これからも若い人たちにもっと伝えてください！」と。

講談は、映像と違い、自分の頭の中いろいろな場面を想像して描いていきます。自分のスクリーンに映し出されたシーンは、いつまでも心の中に残っていくと思うのです」

今年で講談師として二六年目を迎える香織さんは、次々と新作に取り組んでいる。昨年発表した防災講談は、かつて尋常小学校の教科書にも載っていた「稲むらの火」がベース。津波の恐ろしさどう対処すればいいかを、メリハリのきいたテンポで伝えていく。

「頭の片隅にでも講談が残っていれば、いざというとき役に立てるのではないかな。」

今年、「フラガール」を講談にしたいと思っています。何ていったって地元の話ですからね。

それから、ぜひ子どもたちと一緒に講談をしてみたいですね。張り扇をパバンパンとたたいたり、七五調で話したり。講談のリズムは、きっと子どもたちも合っているんじゃないかな（笑）」